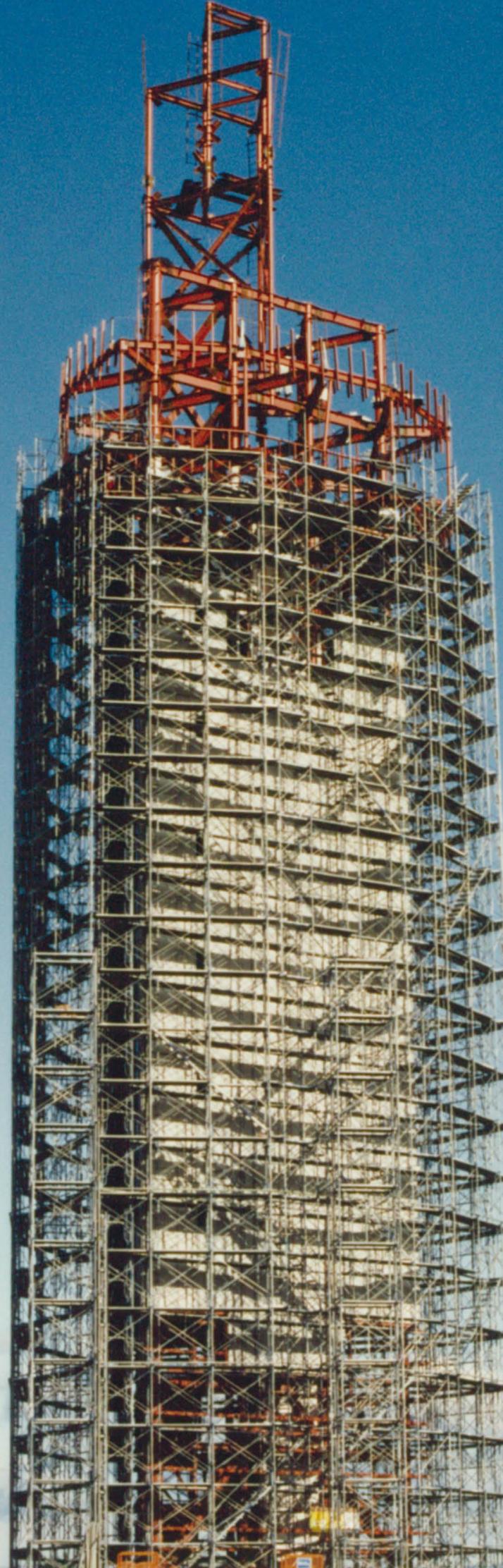


特集 ツクル、ツナガル未来へ

過去、現在、未来、全てがつながっている

先人たちがつくってきた未来があるから、今がある
いつの時代も、町を未来につなげるモノやコトが繰り返されてきた
そのつながりが、また新たな未来をつくり、町が未来に向かって進む
皆さんもこの機会に町の明るい未来を創造しませんか



シンボルタワー未来M・I・R・Aーの
建設中(平成4年頃)の写真

ツナガル三力村 「邑楽」が誕生

糸余曲折を経て
長柄村が編入合併

邑楽の名前が誕生したのは60年以上前のこと。三つの村のつながりからできたことをご存知でしょうか。今回のテーマ「つながり」の原点がここにありました。

明治22年、町村制が施行され誕生した、中長柄村の三力村(現在の邑楽町)の原点となる村です。その後昭和28年、昭和の大

合併のさなか、中野村・高島村・長柄村も合併に向けて揺れ動いていました。同年12月には第1回となる町村合併促進懇談会の開催を機に、合併委員会や合併促進準備委員会などが発足。座谈会を開くなど、三力村合併を推進してきましたが、昭和30年1月、折り合いが付かず、三力村による合併は断念しました。こうして中野村・高島村の二力村合併により「中島村」が誕生。長柄村については、永楽村・富永村(現在の千代田町)と三力村合併で「千代田村」となったのです。

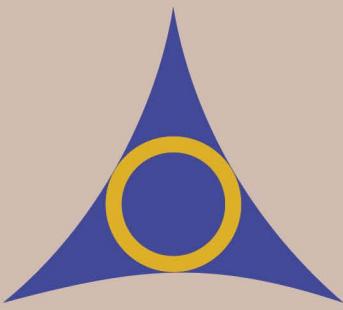
「中島村」が誕生。長柄村については、永楽村・富永村(現在の千代田町)と三力村合併で「千代田村」となったのです。
島村の二力村合併により
糸余曲折を経て、三力村がつながり、今の邑楽町があります。いつの時代もつながりが新たな時代をつくり、そして未来へと息づいていくかもしだせん。

【出典：邑楽町誌（昭和58年2月20日発行）】

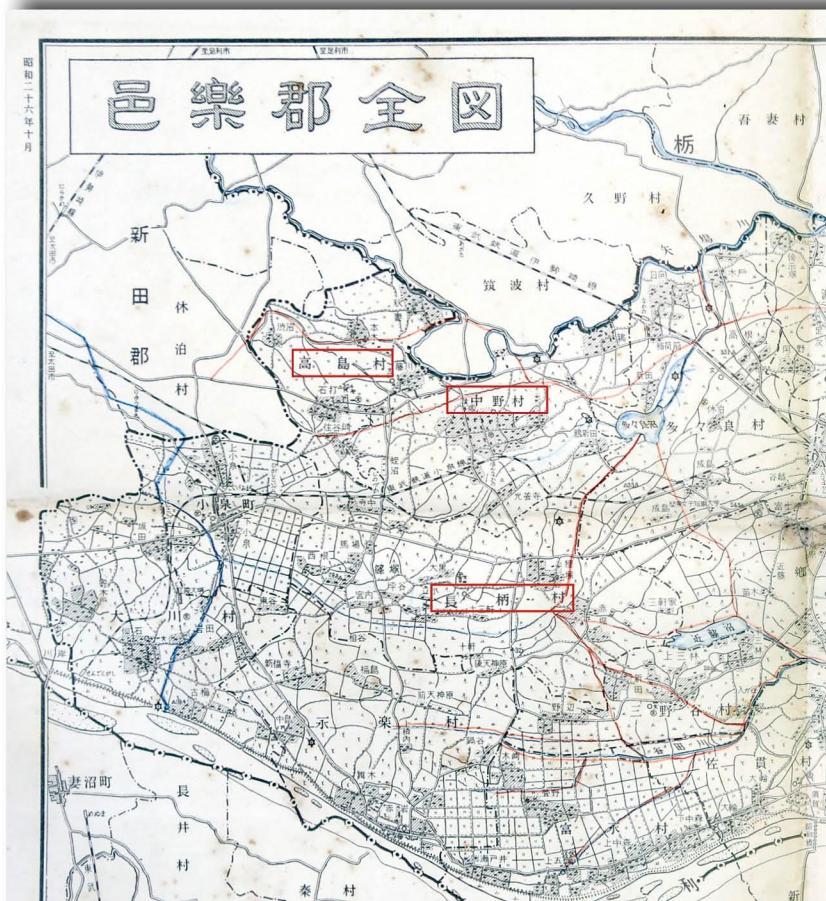


Pick Up 町章にもあったツナガルの意！？

昭和32年、邑楽村と改名されて以来、昭和46年まで町の紋章（町章）は正式に決められていませんでした。そこで町は昭和46年、町民に町章案の公募を行いました。寄せられた55案の中から選ばれたのが現在の町章です。町章には旧三力村合併の意味などが込められています。



町章の三角形は旧三村合併を意味し、その尖がりは躍進する町を象徴。中央の丸は邑楽を少し豊かで健康な意味を表現しています。
(邑楽町紋章の説明より抜粋、昭和47年1月1日告示)



▶昭和26年の邑楽郡全図に当時の三力村の地名が記されています。
その境界をなぞると今の邑楽町の形が現れます。

邑楽ユナイテッドFC スポーツツヅクル

サッカーを通じて地域を盛り上げ、Jリーグ参入を目指に掲げている『邑楽ユナイテッドFC』。彼らが挑戦する、地域活性化の形を代表の中村さんに聞きました。



- ①現在25人の選手が所属。若手の加入にも力を入れている
②東京都や埼玉県に住む運営メンバーとミーティング。コロナ禍ではオンラインを活用し運営会議を重ねる③代表の中村さんは同クラブの監督も務める(写真左)。自身も元はプレイヤーとして活躍していた④今年2月には新たな取り組みとして、邑楽町初となるサッカーイベントをスポーツ・レクリエーション広場で開催。300人が来場した



邑楽ユナイテッドFC 代表
NAKAMURA KAZUYA
中村 和也さん
(藤川・16区)

1988年生まれ。
館林高校→明治大学卒。大学卒業後、専門商社勤務を経て、J1ベガルタ仙台のフロントスタッフとして勤務。2019年に代表の中村和也さんが立ち上げたサッカーカラブ「邑楽ユナイテッドFC」です。

きな夢に挑戦すること
で、地域のつながりをつくり、

地域の活性化を目指すサッカーチームがあります。2019年2月に代表の中村和也さんが立ち上げたサッカーカラブ「邑楽ユナイテッドFC」です。

中村さんは大学卒業後、専門商社を経て、J1ベガルタ仙台のフロントスタッフとして3年間働きました。東日本大震災からの復興をクラブと地域が共に手を携えて取り組むことで生まれる地域の一体感を感じたと語る中村さんは「多くの人がスタジアムに集まり、地元チームの勝利を願って一生懸命応援する」という非日常的な体験を通して、地域が一つになり、郷土愛が生まれていく。それがサッカーという共通のものから生まれていることに、うらやましさ

で語ります。実際、選手の9割以上が東毛地区出身の選手で構成され、運営メンバーも多くが邑楽町出身と、地域のつながりが生んだサッカーカラブになっているといいます。

地域活性化に寄与するためJリーグ参入を目標に

その体験を経て、自分の地元邑楽町でも実現したいと決意。地元に戻り、早速行動に移したといいます。「今考えれば、選手集めとかのことも考えずに急に走り出した感はありましたがないで少しづつ形になっていました。(笑)。邑楽町に住む、双子の弟や昔のサッカー仲間、そして小・中学校、高校時代の友人とのつながりで少しづつ形になりました。つながり本当に感謝しています」と笑顔を感じました」と話します。

思いがつながりクラブ設立地元のつながりに感謝

そのつながりで少しづつ形になっていました。つながり本当に感謝しています」と笑顔を感じました」と話します。

たいです」と中村さんは語ります。

現在、邑楽ユナイテッドFCとパートナーシップを結ぶ企業は49社、ファンクラブ加入者も50人以上になっています。また、スポンサーとして応援する企業の他、雇用や練習用グラウンドの提供などのパートナー

シップを結ぶ企業も出てきます。こうしたつながりが邑楽ユナイテッドFCの原動力となっていると話す中村さんは「ベガルタ仙台で見た、サッカーを通じた地域のつながりや盛り上がりが忘れられなくて…(笑)。あの光景をここで実現したい。私たち邑楽ユナイテッドFCがJリーグに参入するまでの過程で、地域のたくさんの人たちがつながり、仲間となり、共にJの舞台まで歩んでいただけたらうれしいです」と夢を語ってくれました。

たいです」と中村さんは語ります。

現在、邑楽ユナイテッドFCとパートナーシップを結ぶ企業は49社、ファンクラブ加入者も50人以上になっています。また、スポンサーとして応援する企業の他、雇用や練習用グラウンドの提供などのパートナー

シップを結ぶ企業も出てきます。こうしたつながりが邑楽ユナイテッドFCの原動力となっていると話す中村さんは「ベガルタ仙台で見た、サッカーを通じた地域のつながりや盛り上がりが忘れられなくて…(笑)。あの光景をここで実現したい。私たち邑楽ユナイテッドFCがJリーグに参入するまでの過程で、地域のたくさんの人たちがつながり、仲間となり、共にJの舞台まで歩んでいただけたらうれしいです」と夢を語ってくれました。

クラブの活動を応援する企業が増えています。胸口ゴは東京都の企業「mikoto」、クラブが発行するORA MAGAZINEに町内企業「Kayustyle」など町内外問わず、つながりが広がっています。



基礎となる土台作りはしっかりと取り組んでいきた
かりと取り組んでいきた
いと思います。また、贊
同者の期待に応える
ため、チームの強化
はもちろのこと、
結果を出していき



クラブの情報は上記QRコード
からチェックできます

GROUND PARTNER



ナイター練習もできるように、照明を改修した太田治工のグラウンドで練習する選手たち

邑楽町からJリーグを目指す、邑楽ユナイテッドFCさんの熱い思いに押されて、ぜひ応援の練習に使用できるようになりたい。私たち邑楽ユナイテッドFCがJリーグに参入するまでの過程で、地域のたくさんの人たちがつながり、仲間に、古くなった照明設備を改修しました。



株式会社太田治工

新商品開発室長
柴崎卓也さん

サッカーで地域がつながる
あの一体感をこの地で実現したい

GOURMET CURRY



邑の「ゴーヤ入りキーマカレー」 食べてつながりが 特産野菜の活用

苦みとうまみの絶妙なバランスを追求した『邑のゴーヤ入りキーマカレー』は邑楽町産のゴーヤと群馬県産の日本酒「水芭蕉」も使用している他、野菜なども豊富に使用し、体にも優しい一品になっている、邑楽町初のゴーヤキーマカレーです。

「自慢のカレー」と町の特産品で何かできないか、ずっと考えていました。白菜やキヤッサバの案もありましたが、インパクトた。

つながりで始まった お店と商品開発

シーザーズカフェ&デリ 代表

ARAI TAKAHIRO

新井 隆浩さん(水立大黒・23区)

邑楽館林地域の特産品の一つともなっている、「二ガウリ(ゴー
ヤ)」。この二ガウリを活用して新商品の開発をした新井さん。
開発につながった理由とは。

ワ インなどを扱う酒販店のかたわら始めた
というシーザーズカ

フェ&デリ。事業のはじまりは、高校の同級生とのつながりだつたという代表の新井さんは「東京都でオーナーシェフをしていた青木シェフが再開発など影響で店を閉め、地元へ帰郷していました。私も食を提供することに興味があつたことか

ら、シェフに声を掛け昨年3月に開業しました」と話します。

このお店の看板メニューの一つが「カレー」。開業する前から産業祭への出店などで人気商品だったというカレーを、お店でも提供したいという思いも開業への後押しになつたといいます。しかし、開業をしたのもつかの間、コロナ危機に直面。難しい時間を過ごしました。その中で新たな構想として生まれたのが町の特産品と店の看板メニューを使った商品開発でした。

「自慢のカレー」と町の特産品で何かできないか、ずっと考えていました。白菜やキヤッサバの案もありましたが、インパク

トと他には無いものをとゴーヤを選びました」と話します。ゴーヤは邑楽館林地域では東日本一と呼ばれるほど、生産量の多い農作物。最盛期は沖縄に出荷している農家もいるほどです。

商品開発には苦悩も多かつたと語る新井さんは「ゴーヤは苦手な人も多いので、味のバランスと食感にはとてもこだわりました」と話します。試作は10回以上を数え、完成まで半年以上掛かったといふこだわりの『邑のゴーヤ入りキーマカレー』。新井さんは完成した喜びを「邑楽町産のゴーヤを使ったカレーは、ぜひ一度皆さんに食べてほしいです。そしてゆくゆくは邑楽町の観光商品になつて、町のPRに貢献できる商品となってくれればうれしいです」と語ってくれました。

CRAFTSMEN 町内4人の職人が結集 技術のツナガリが生むモノ

町の産業を支えてきた町工場。その数は町内で100社以上を数えます。今回つながりをきっかけに新たなプロジェクトに挑戦した4人の2代目社長。つながりが生んだものとは。

町 工場の技術力は長年培われた伝統ともいえるものです。その技術力を生かし、新たな可能性に挑戦しようと約6年前から活動していたのが、金子純之さんと岡島克実さんでした。金子さんは「ものづくりの良さを伝えたい」という思いから『MONO-PRO』というプロジェクトを続けてきました。自社で使うレーザー加工技術を生かして、木を使つたおもちゃを作つたのが始まりです。町の産業祭などにも出店し、好評をいただいていました」と話します。



活動を続ける中、今回のプロジェクトが舞い込みます。金子さんは「町から金婚式の記念品として贈るフォトフレームを作りたい」という相談がありました。これはチャンスだと思い、全て邑楽町の工場で製作したいと周りに声を掛けました」と話します。

4社がタッグを組んで「メイドイン邑楽」のオリジナルフォトフレーム製作が始まっています。板加工で参加した長山さんは「無垢の板で作ることにこだわりたかったので、板が反らなりました」と話します。

工場の技術力は長年培われた伝統ともいえるものです。その技術力を生かし、新たな可能性に挑戦しようと約6年前から活動していたのが、金子純之さんと岡島克実さんでした。金子さんは「ものづくりの良さを伝えたい」という思いから『MONO-PRO』というプロジェクトを続けてきました。自社で使うレーザー加工技術を生かして、木を使つたおもちゃを作つたのが始まりです。町の産業祭などにも出店し、好評をいただいていました」と話します。

最後の仕上げや組み立て、梱包を担当した岡島さんは今回のプロジェクトを終えて「町工場の技術は意外と人目に触れないことが多い、いいものを作つても表舞台に立つことはありません。そうした機会をいただけたことは大変ありがたいです」と話します。

トと他には無いものをとゴーヤを選びました」と話します。ゴーヤは邑楽館林地域では東日本一と呼ばれるほど、生産量の多い農作物。最盛期は沖縄に出荷している農家もいるほどです。

商品開発には苦悩も多かつたと語る新井さんは「ゴーヤは苦手な人も多いので、味のバランスと食感にはとてもこだわりました」と話します。試作は10回以上を数え、完成まで半年以上掛かったといふこだわりの『邑のゴーヤ入りキーマカレー』。新井さんは完成した喜びを「邑楽町産のゴーヤを使ったカレーは、ぜひ一度皆さんに食べてほしいです。そしてゆくゆくは邑楽町の観光商品になつて、町のPRに貢献できる商品となってくれればうれしいです」と語ってくれました。

トフレームプロジェクトが舞い込みます。金子さんは「町から金婚式の記念品として贈るフォトフレームを作りたい」という相談がありました。これはチャンスだと思い、全て邑楽町の工場で製作したいと周りに声を掛けました」と話します。

今回のプロジェクトに参加したメンバーの4人(写真左から)
▶太陽電子工業(有)
岡島克実さん(西ノ根宮内中島・24区)
▶金子製作所
金子純之さん(坪谷・22区)
▶長山建築工房
長山清さん(渡沼・19区)
▶松村螺子(有)
松村光明さん(店高原・28区)

つながりで始まった 面白いこと



す」と笑みをうかべます。

プロジェクトリーダーの金子さんは「私のこれまでの活動も、今回のプロジェクトもつながりが生んだものです。一人でできなくても何人かでつながることが生まれます。そうしたことを通じてものづくりの良さ、そして邑楽町の町工場の力を発信していくべきだと思います」と話してくれました。

人がツナガリ 町の未来をツクル

人がつながり、新しいモノやコトにつながっていく。町の活性化を目指して取り組む人たちの事例を紹介してきました。

そうした取り組みが町の未来をつくっていく理由とは。

全

国の多くの自治体が直面する少子高齢化や人口減少。その中で地方の衰退が問題視されています。そこに歯止めをかけ、地方の活性化を促進しようと始まったのが「地方創生」。

各地域が特徴や資源を生かし、持続可能な地域をつくっていくことを目的としています。

片山さんは、市町村と県が連携して地方創生を推進していくためのつなぎ役として、今年から新たに群馬県庁地域創生課に設置された『地域支援員』を務めています。そんな片山さんは「私も公私ともにさまざまなるための事業に携わってきました。どの事業も志を持った人同士でもアクションを起こすことによって、持続可能な地域がつくれていくのではないかと思います」そして地域を想う『人』と自治体がつながって、共に未来に向けてエンジンを動かし続けることで、持続可能な地域が必要になります」と話してくれました。

邑楽町のエンジンを つくる、つながる未来へ

邑楽町も全国の自治体と同じように人口は減り続けていて、持続可能な地域づくりは他人事ではありません。だからこそ町の未来を明るくするため、町のエンジンとなる取り組みが必要なのかもしれません。

今回紹介した4つの取り組みのようなことが、将来町のエンジンとなり、新しい価値を生み出すことで町の新たな魅力が生まれるのではないか。そう、邑楽町には未来（MiR A i）があるから。

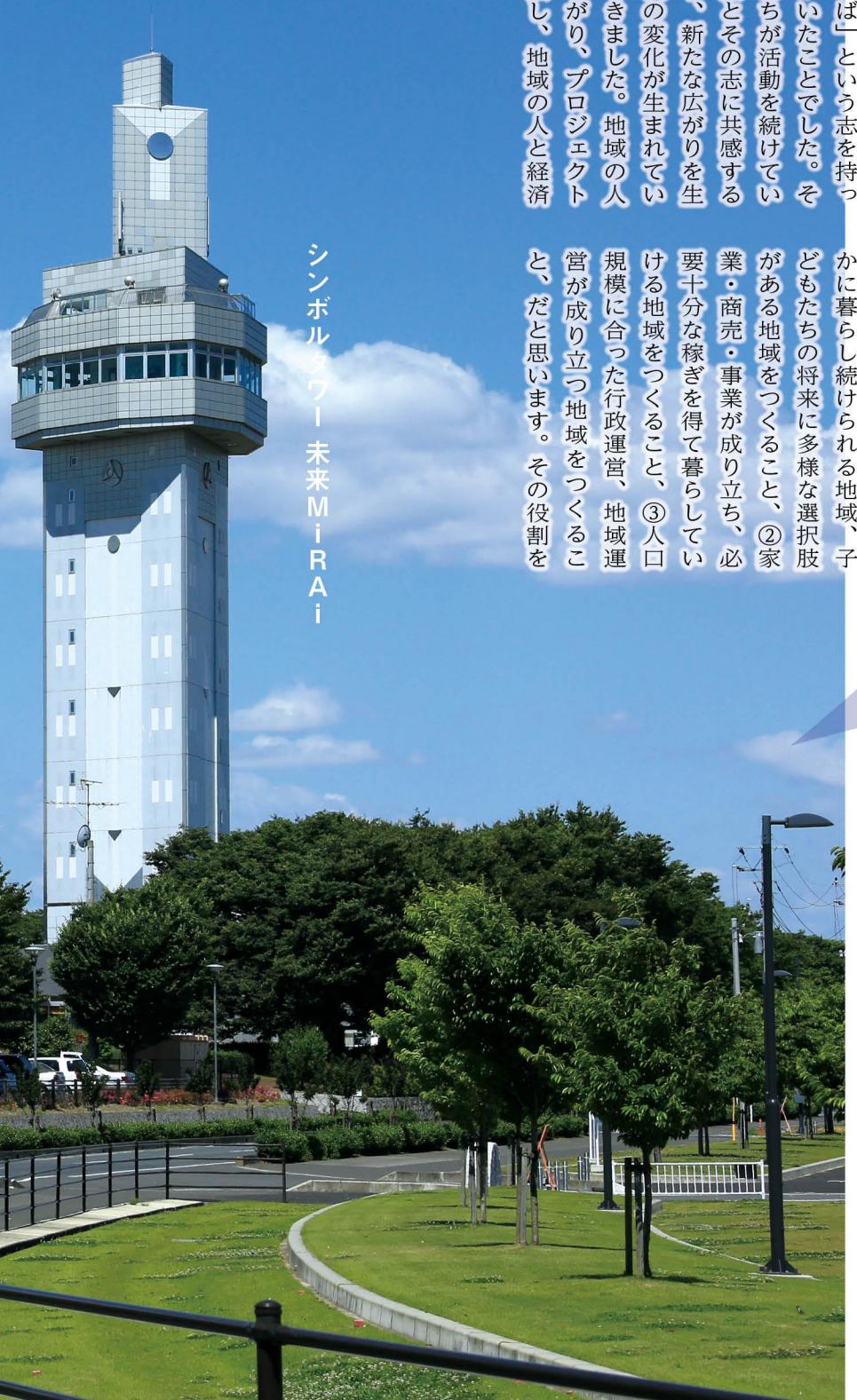
邑楽町にはMiRAiがある

未来にツナガル人がいる

未来をツクル人がいる

そうした想いがツナガッテ

まちの明るい未来へツナガル



シンボルツワー 未来MiRAi

ツクル、ツナガル 未来へ

士のつながりから始まり、プロジェクトが生まれ、まちに変化が起こってきたと感じています。だから、地域活性化のカギは『人』。実際、富岡市や館林市、みなみ町などで携わってきた民間プロジェクト主導のノベーションまちづくり事業でも、始まりは「このままではいけない」「豊かに暮らしあけられることを目的としています。地域を自分たちでつくっていかなければ」という志を持つ人たちがいたことでした。そういう人たちが活動を続けていたら、自然とその志に共感する人が集まり、新たな広がりを生み出し、次の変化が生まれていきました。地域の人同士がつながり、プロジェクトをつくり出し、地域の人と経済

を動かす、それが地域のエンジン（原動力）となるのです」と話します。

片山さんは「社会全体の傾向としては、当面、人口減少は避けられない状況にあると思いますが、そういった社会において大事な視点・取り組みは、①豊かに暮らしあけられる地域、子どもたちの将来に多様な選択肢がある地域をつくること、②商業・商売・事業が成り立ち、必要な稼ぎを得て暮らしていける地域をつくること、③人口規模に合った行政運営、地域運営が成り立つ地域をつくること、だと思います。その役割を

変化のきざしは
人から始まる

群馬県庁 地域創生部 地域創生課
地域連携係 地域支援員

KATAYAMA SHOHEI
片山 翔平さん

公私を通じて、県内各地における民間主導の持続可能な地域づくりに奔走しつつ、組織横断型の県庁官民連携プロジェクトチームを立ち上げ、経営的視点に立った公共空間・施設の活用を進め。令和3年4月地域との連携強化のために新たに設置された地域支援員として、東毛エリアの活性化に取り組む

